

トウモロコシのはなし



文／北川祐子

国内の作付状況

トウモロコシは収穫の最盛期を迎えているが、気になるのはその作付面積と平均収量だ。収量についてはまだデータが出そろっていないため、ここでは今年度の作付状況を報告する。

各地の作付状況を図1に示した。全国の作付総面積は約235haになった。昨年度の約185haに比べると、着実に拡大している。

北海道は今年度200ha規模の作付けを目標としていたが、昨年度の約130haから50ha増の約180haとなった。なかでも大きいのは空知子実コーン生産者組合による作付けで約120ha、収量にして1000〜1100tの取り扱いを見込んでいる。

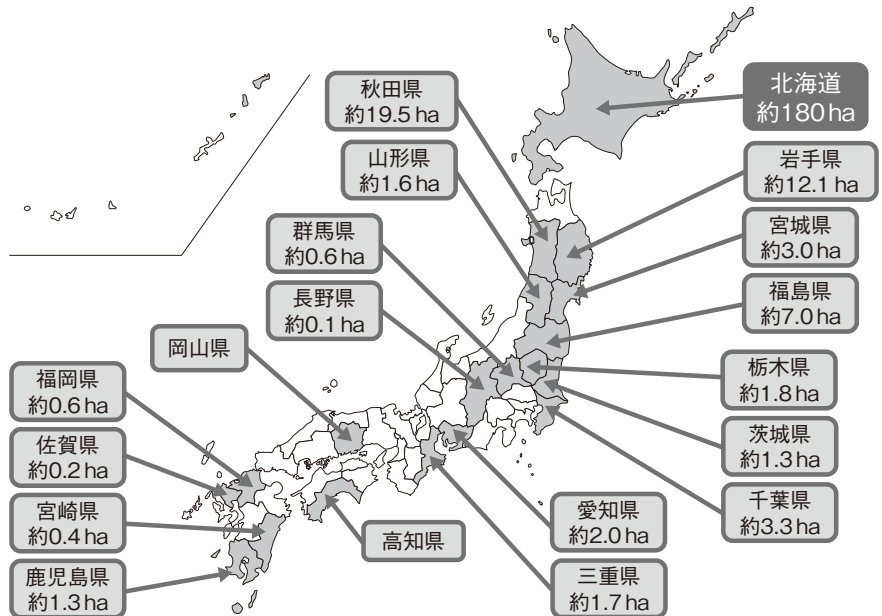
一方の本州以南では、昨年までに取り組みを始めた地域でも仲間が増えたり、面積を拡大したりと継続的な取り組みが見られる。また、今年から新たに山形（鶴岡市、飯豊町）長野、高知、岡山、福岡（那珂川町、桂川町）、鹿児島（鹿屋市）でも取り組みが始まった。とくに山形県飯豊町、鹿児島鹿屋市の取り組みには行政が積極的にかかわっており、地域の新たな事業として期待が寄せられているようだ。

生産の順調な伸びと並行して、販売先となる契約先をそれぞれ確保しており、その用途は畜産用飼料を筆頭として、製粉材料、商社、食品会社など多岐にわたる。

一方で、昨年度に取り組んだものの継続的な作付けを断念したところも複数ある。かねてより指摘してきた乾燥・貯蔵施設、販売先の確保が難しいことがその原因の一つだ。なかには同じデントコーンを作付けしながらも子実として収穫せず、サイレージ用に切り替えた経営もある。同じ地域である程度のロットがそろわなければ、乾燥・貯蔵施設の確保も、安定供給を望む販売先との契約という面でも、試験栽培の域を超えることはできない。引き続きこれらの問題は、

来年度以降の取り組みに向けた課題

図1：国産子実トウモロコシの作付状況（2016年作付時点）



米国の作付状況

では、現在日本が輸入トウモロコシの大半を調達している米国の今年の作付状況はどうなっているのだろうか。

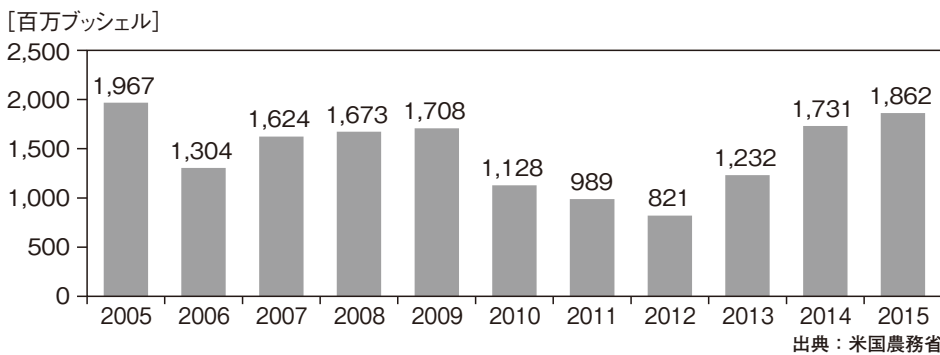
米国農務省（USDA）が6月30日付で公表した作付展望レポートに

表1：米国のトウモロコシ生産需給予測（2016年8月現在）

	2013年産	2014年産	2015年産	2016年産 予想(8月)	単 位	
供給	作付面積	95.4	90.6	88.0	94.1	百万エーカー
	収穫面積	87.7	83.1	80.7	86.6	
	生産量	13.9	14.2	13.6	15.1	十億ブッシェル
	期首在庫	0.82	1.2	1.7	1.8	
	総供給量	14.8	15.5	15.4	16.8	
需要	平均単収	158.8	171.0	168.4	175.1	ブッシェル/エーカー
	飼料その他	5.2	5.3	5.3	5.6	十億ブッシェル
	エタノール、併産物	5.0	5.2	5.2	5.3	
	ほかの国内利用	1.4	1.4	1.4	1.4	
	輸出需要	1.9	1.9	1.7	2.1	
	期末在庫(余剰)	1.2	1.7	1.9	2.4	

出典：World Agricultural Supply and Demand Estimates, USDA, August 12, 2016

図2：米国のトウモロコシの期末繰り越し在庫の推移



よると、2016年産トウモロコシの作付面積は9414万8000エーカー(約3766万ha)で、昨年の8799万9000エーカー(約3520万ha)から7%増加した(表1)。トウモロコシを作付けしているほとんどの州で昨年より作付面積を増やしており、今年は総じて収穫

量が増える見込みだ。その収穫量だが、8月末現在天候が良好なこともあり、生育は昨年より順調な地域が多い。平均単収は昨年比4・1ブッシェル増の175・1ブッシェル/エーカー(約11t/ha)と史上最高の収量になるだろうと予測している。なかでもコーンベ

ルト地帯にあるイリノイ州では200ブッシェル/エーカー(約12・7t/ha)を超える単収になる見込みだ。仮に昨年と同じ収穫面積(8660万エーカー)だとしても総収量は152億ブッシェルに及ぶと見られている。

余談だが、米国ではトウモロコシの単収が年々増加しており、1エーカー当たり2000年は136・9ブッシェル(約8・7t/ha)だったが、10年には152・8ブッシェル(約9・7t/ha)、15年には168・4ブッシェル(約10・6t/ha)と順調に伸びている。今年は順調な天候に後押しされ、さらに大幅な伸び率を示しそうだ。

また、USDAは16年産について、病害の発生状況にも大きな問題がなく、トウモロコシ自体の品質も75%が良好であると発表している。

ちなみに、需要としては飼料用と輸出用が若干増えるの見込まれている。この輸出増は、ブラジルの干ばつによる減産、アルゼンチンの刈り遅れの影響を受けて上方修正された。ただし、大勢としては昨年から大きな変動は考えられていない。

米産の在庫繰り越しが過去10年で最大化する影響

米国産トウモロコシについては過

去最大の収量が予測される一方で、国内在庫の保管場所の不足を不安視する声が出てきている。図2に示したように、15年からのトウモロコシの繰り越し在庫がここ10年で最多の18億ブッシェルに及ぶためだ。

また、同じく米国の主要作物である大豆の繰り越し在庫も昨年比38%増となっており、加えて16年産も生育良好で豊作であるとの予想が出ている。トウモロコシ、大豆ともに需要が大きく増えなければ、16年産の期末在庫はさらに膨らむのではという懸念が出てくるのも当然のことだ。

在庫が多くなるともちろん価格にも影響する。9月のシカゴ市場でのトウモロコシの先物価格は3・5ドル/ブッシェルを下回る価格で推移しており、ここ1年では最低値をつけている。海上輸送運賃に影響を与える原油価格が大きな値上がりを見せていることから、輸入価格は下がると考えるのが自然だ。

輸入トウモロコシの価格が、国産子実トウモロコシの取引に直接影響しないとはいっても、指標のひとつとなっていることは否めない。来年度の作付計画や需要先を考慮する際には、国内の需給動向などの情報だけでなく、米国での生産動向や在庫状況をぜひ注視しておきたい。